

街角

Kiseki Yu



金網を抜けたら黄金の闇夜が

眩いわ

ふわりと浮かぶように跳ねて

まるで魚のようにお下げ髪が踊る

音楽も無いのに

うねる旋律

闇夜の奥に何があるのか知りそうになった

だけどこんな所には居られないのよ

私はただ走る

風に押される足に任せ

渦を巻く煌めきに

心を痛めようとも

明日へ行く道を知る

私はただ走るの

あなたの居る場所は

.02 雨傘

花が咲いたら

遊びに行くわ

君のお庭

春の残骸

季節は何故こうも目紛しいのかしら？

一人で遊んでいても聞こえる

君の歌声を

聞かないふりするのがやっとだった

いつしか花びらは地に墮ち

雨の降るお空が

灰色

煙る街角

雨傘を差して

躍り跳ねる水たまりに

残された手紙

読むのを躊躇って

沈めた

思いの外 深く

深く

花が咲いたら

会いに行くわ

君のお庭

春の残り香

取り出した時には

もうぐちゃぐちゃで

握り潰せもしないほど

散り散りに果てて

お返事も出来ないね

何も出来ずにいた

忘れられていくのかしら？

春の残骸



私は向かった

路地裏の小径をすり抜け

いつもの場所

いつもの椅子に腰掛け

通り過ぎる人々を観察する

人は何故

歩くのか

うっすらとした疑問符

煙草の煙と共に消えてく

猫が居る

鳴くこともなくただ

「あんたになんか興味無いわ」と

言わんばかりに毛繕う

穏やかな日差し

愛の歌

ささやかな午後

町は人を困って

日々を想うのは勝手だろう

私も勝手に生きている

人は何処へ

歩くのか

うっすらとした疑問符を

踏みつぶして消した

私は立ち上がり

路地裏の小径をすり抜け

いつものように

帰路につく

海岸沿い

海を拾う

小さな欠片を

もう何年も

波打ち際

足の裏の痛み

いつも水平線を観てる

もう何年も

岩陰

砂山

潮の香

頬に張り付く風

君に会いに行く術を

もう何年も



雑然とした看板立ち並ぶ

賑わう人ごみの中

ぽかり

浮かんだ雲が

こっち見て笑った

電柱の上の少年

見下して飛んでった

看板も

電線も

交わし潜り抜け行く

ヒーローは

こんな町にいないんだって

空飛んで

聞き流す

雑踏も

夢の中

掴めない現実とどう違う？

ありふれた

生活の中

人は少年を忘れてく

雑然と立ち並ぶ

巨大なビルと群像

ふと止まった人ごみの中

ばかり

浮かんだ雲が

こっち見て笑った

手渡してここから

始まるものがある

手のぬくもりを共に

心を受け入れると書いて

愛だろうと

賢い人は言った

それは

すべて

歴史の中で

人類が培養してきた

そんな愛のすべては

何処へ逝き

何処へ還るのだろうか

そんなことはどうでもよくて

ただ

この手に残る

ぬくもりが

愛おしいから

生きようと想った

大きな窓のある所に座り

そこから見える風景を眺めながら

カップに注がれた

熱いお茶を飲む

ちょっとゴツゴツとした

厳つい形のティーカップは

あなたの手と同じ

大きさというのは

物差しじゃ測れないのね

熱い緑色のお茶は

飲むとチョコレートが欲しくなる

特にこんな季節は

大きな窓は白く曇り

風景を幻想に変えてく

いつかあんなふうにと

夢見てた

それは今でも

窓の外の出来事のように

移ろい逝く季節に

何度手を振っても

私はここで

また暢気にお茶など飲んで

けどそろそろ

窓の外へ出たいの

あなたと手を

繋ぎたいから



明日も会えるといいねって

笑って手を降ると

その影は幾度となく瞬いて

眠る

森の深い

寝床も無いわ

あなたの顔を思い出す度に

生々しい温度は

額から

足へ届く

眠る

深い森の

夜の星と

明日もまた会えるといいねって

もう手は振らないわ



街角

<http://p.booklog.jp/book/60228>

著者：きせきゆう

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/yukiseki/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/60228>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/60228>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ